

年月日 2011年11月01日(火)～07日(月)
回数 第三回・四国お遍路(通算歩行日数=11日～16日)
参加者 後藤隆徳、高岡八千代、土屋弥生、陶山節子、山口五月、渡辺典子、鈴木新平、
鈴木綾子、陶山泰信(お遍路でなくランニング)=8名+1名

遍路寺

- 二十五番札所 津照寺(しんしょうじ) 高知県室戸市室津2652-1
ご本尊=楫取延命地藏菩薩 おん かかかび さんまえい そわか
メモ=室戸岬から海岸沿いを6kmほどゆくと町中に小高い山があり、その
山上に本堂がある。参道右に大師堂と本坊。本堂へは125の急な石段が
あり、ご本尊は大同2年、弘法大師が巡錫されたときに刻まれた延命地藏
菩薩。秘仏で拝観はできないが、海上の安全と火難除けの霊験あらたかとい
う。
- 二十六番札所 金剛頂寺(西寺・こんごうちょうじ) 高知県室戸市元乙523
ご本尊=薬師如来 おん ころころ せんだり まとうぎ そわか
メモ=津照寺をあとに、室戸から西北へたどると土佐湾に向って小さく突
き出た岬がある。硯の産出で知られる硯ヶ浦のある行当岬で、海拔200m
の頂上に金剛頂寺がある。室戸岬の最御崎寺と相對しているのが最御崎寺
を東寺、金剛頂寺を西寺ともいう。
- 二十七番札所 神峯寺(こうのみねじ) 高知県安芸郡安田町唐浜2594
ご本尊=十一面観世音菩薩 おん まか きゃろにきや そわか
メモ=「真っ縦」といわれる勾配45度の1.3kmの急坂で知られた土佐
関所。寺のある山頂まで3.3kmある。遍路で難行した宮地達観「真っ縦」
と言われる勾配45度の1.3kmの急坂。知られた土佐氏の奉仕で自動車道
が開通し、歩かずして山門まで行ける。三菱王国を築いた岩崎弥太郎の母
は、幕末のころ弥太郎の開運を祈願して、この急坂を上り、21日の間2
0km離れた井ノ口から神峯寺へ日参した。やがて弥太郎は大成し後に山林
を寄進し、報恩を感謝している。
- 二十八番札所 大日寺(だいにちじ) 高知県香美郡野市町母代寺476
ご本尊=大日如来 おん ばざら だどばん
メモ=江戸時代のころ土佐の国へ入るには、国手形(身分証明書)や添手
形(通行許可書)指定された道の通行、期間、一定の旅費を所持した者な
どこまかい制約があった。遍路は大師の遺跡を苦行して歩く求道者である
が、このころは社会の敗残者がまぎれこみ、厳しい取締りとなった。
現代は自由で物資も豊富、交通機関も発達し、それだけに信仰の旅が観光
になりかねないけれど、土佐は修行の霊場、精進したい。

- 二十九番札所 国分寺（こくぶんじ） 高知県南国市国分546
 ご本尊＝千手観世音菩薩 おん ばざら たらま きりく
 メモ＝野市から日章、後免へと田園地帯をたどる。「土佐はよい国南を受けて、年にお米が二度とれる」と、香長平野では水稻2期作が盛んで、水田開発にあたった野中兼山の名はよく知られる。国分寺は後免駅から北西へ約4^キに入った国分川の北にある。こんもりとした樹木に覆われ、周囲に往時を物語る土壇が残っている。明暦元年（1655）の仁王門を入れれば、柿葺き寄棟造りの金堂（本堂）がある。
- 三十番札所 善楽寺（ぜんらくじ） 高知県高知市一宮しなね2丁目23-11
 ご本尊＝阿弥陀如来 おん あみりた ていせい からうん
 メモ＝国分寺から高知の市街へ入る手前に土佐一宮がある。かつては神辺郷といい、土佐では最も古く開けたところで、桓武天皇のころ、弘法大師がこの地に巡錫し、土佐一ノ宮の別当寺として善楽寺を建立し、三十番・霊場とした。以来、一ノ宮別当寺として法灯を維持してきたが、明治の廃仏毀釈で廃寺となった。
- 三十一番札所 竹林寺（ちくりんじ） 高知県高知市五台山3577
 ご本尊＝文殊菩薩 おん あらはしゃ のう
 メモ＝聖武天皇は唐の五台山で文殊菩薩を拝まれている夢を見られ、我が国にもこれに似た霊地があるにちがいないと、行基菩薩に探し出すよう命じられた。神亀元年（724）行基菩薩は五台山に似た山容を見つけ、ここに寺を建立し、栴檀の木に文殊菩薩を刻んで安置した。これが竹林寺の始まりで、後に弘法大師が巡錫され、札所に定められた。
- 三十二番札所 禪師峰寺（ぜんじぶじ） 高知県南国市十市3084
 ご本尊＝十一面観世音菩薩 おん まか きゃろにきゃ そわか
 メモ＝五台山をあとに、下田川を渡り、トンネルを抜けると、目前に100m余りの小高い山が現れる。この山容が観世音の補陀洛山（理想の山）。さながら八葉の蓮台に似ている事から、大同二年（807）弘法大師が巡錫して八葉山の山号をつけ、霊場としたという。
- 三十三番札所 雪蹊寺（せっけいじ） 高知県高知市長浜857-3
 ご本尊＝薬師如来 おん ころころ せんだり まとうぎ そわか
 メモ＝昔の遍路は種崎から長浜へ船で渡ったが、今は浦戸大橋が出来て便利になった。長浜は長曾我部元親の城下町として開けた所で、町を抜けると秦神社があり、祭神に元親の像が祭られている。この神社の隣に雪蹊寺がある。延暦年間に弘法大師によって開創され、当初少林山高福寺と称し、その後運慶、湛慶のゆかりで慶運寺に改めた。石柱の門を入れれば観音堂、鐘楼、大師堂、本堂がある。ご本尊は薬師如来。脇他は日光・月光菩薩、いずれも運慶晩年の作。
- 三十四番札所 種間寺（たねまじ） 高知県高知市春野町秋山72

ご本尊=薬師如来 おん ころころ せんだり まとうぎ そわか
メモ=吾南平野の米と菜どころで知られるだけに、田園の用水に沿って
遍路道がつけられている。田園の中に地藏堂、本坊、持仏堂、大師堂、
観音堂、本堂があり、それに相対して石仏が並ぶ。観光客とは無縁なだけ
に静かな札所。

●三十五番札所 清滝寺（きよたきじ） 高知県土佐市高岡町清滝568-1

ご本尊=厄除薬師如来 おん ころころ せんだり まとうぎ そわか
メモ=土佐の町から西へ向うと前方に山々が立ちはだかる。山麓の農家に
土佐の手漉和紙の原料楮が見られ、急坂を約800m程登った山（海拔400
m）の中腹に清滝寺がある。この境内の一角に「いらずの山」と称し、誰
人も近づかない所がある。そこに弘法大師の十大弟子に数えられる真如の
建てた逆修の塔がある。真如は入唐後さらにインドへの求道の旅を続け、
途中不慮の死を遂げた。

●三十六番札所 青龍寺（せいりゅうじ） 高知県土佐市宇佐町龍旧寺山601

ご本尊=波切不動明王 のうまく さんまんだ ばざら だん せんだ
まかろしゃだ そわたや うんたらた かんまん
メモ=宇佐の渡し（龍ノ渡し）は、弘法大師が8人の供を残し、子孫が渡
しを近年まで守り続けて来た。

しかし、宇佐大橋が開通し渡しは無くなった。昔の遍路は幾つも川や海を
越えたが、多くは渡し舟を利用した。また、橋が架かり海岸線に道路が開
通した後、渡し舟は姿を消した。

弘法大師は中国留学中、青龍寺の恵果阿闍梨について学ばれたが、帰国に
当たり、師の恩に報いるため、有縁の勝地を選ばれるようにと、明州から東
に向かって独鈷杵を投げられた。

独鈷杵は東方に飛び、やがてこの地の山上の松に止まった。帰国した大師
は、この地に巡錫して独鈷杵を感得し、弘仁六年（815）嵯峨天皇に奏
聞し一字を建て、自刻の浪切不動を安置し、恩師を慕って寺名を青龍寺と
した。仁王門を入ると滝があり、行場になっている。120段余りの石段
を上り詰めた所が本堂。海上安全を祈る漁民の多くの絵馬が、納められて
いる。

使用バス 清水町・D観光（ドライバー・T）

第1日目 11月01日（火・晴小雨） 通算歩行日数=11日 距離=6.2Km
清水町3:00—ヨ—カ堂前3:10—下土狩駅3:15—なめり駅3:20
—竹沢種苗店5:20—東名—浜名湖SA—新名神—淡路SA10:25—前回
最終地発14:30—二十五番札所・津照寺15:00~25—二十六番札所・
金剛頂寺16:25~40—バス—民宿「うらしま」(泊)17:20

地理院地図

GSI Maps



第三回お遍路。出だしの天気は良かった。淡路SAには前回より早く着いた。室戸岬で休憩。自転車に大きな荷物を付け回っているオジさんがいた。前回最終地の室戸警察署近くから出発。R55を北上し、二十五番札所・津照寺着。赤い山門と長い階段の先に、竜宮城の様な鐘楼があった。



二十五番札所・津照寺



民宿「うらしま」



二十六番札所
金剛頂寺

辺りは、室津港が近く魚屋に豊富な魚が並んでいた。だいぶ遅くなったが、今日の宿「うらしま」前を通過し、二十六番札所・金剛頂寺まで頑張る。お寺は山の上で、標高約150mある。ショートカット道を上る。なかなかの道だった。

お勤めを済まし、バスで山を下り、今日の宿「うらしま」に入る。民宿の経営者は不在。従業員の対応はイマイチだった。SAちゃんが掛け軸を忘れて来て、どうするかいろいろ知恵を絞った。

第2日目 11月2日(水・小雨のち晴) 通算歩行日数=12日 距離=32.5Km
起床5:30-バス-金剛頂寺発6:40-御霊跡10:40-昼食「ホテル・なはり」11:45~12:45-神峯寺入口14:10-二十七番札所・神峯寺(こうのみねじ)15:20~16:10-遍路道16:45-民宿「浜吉屋」(泊)17:00

朝からスッキリしない天気。バスで寺まで上り記念撮影。寺から山道を下って海岸に出る。以後、遍路道はずっと海岸線を進む。吉良川町は、古い街並みが続き「重要伝統的建造物群保存地区」の大きな看板があった。

羽根岬はショートカットの山道があった。最頂部の峠は、室戸市を俯瞰する気持ち良い所。このころより天気はいい感じになった。



吉良川町並み



羽根岬の峠

先に大師堂と御霊跡があった。奈半利町に入った。ホテル「なはり」で昼食を摂った。ビアをいただき、サバ定食・焼き肉などを食べた。ホテルは、バスお遍路さんも利用するようだ。

安田町から神峯寺に向かう。寺は山上だった。標高約400mある。これはなかなか厳しい。時間が遅いので飛ばして、汗だくで上る。杉の木撤去の大きなクレーンが唸っていた。お勤め後、山を下る。クレーン作業の警備の方が、新しい道を教えてくれた。上って来た道の途中から右折して西に下って行く道だった。

下りきった所にお遍路案内があった。今日はここで終了。バスで今日の宿「浜吉屋」

に入る。嫁さんがいないで、親子でやっていた。オババは八十何歳かだったが、なかなか手際は良かった。他のお遍路さんも何人か宿泊していた。

二十七番札所・神峯寺



浜吉屋



浜吉屋のオババ

第3日目 11月3日(木・小雨のち晴) 通算歩行日数=13日 距離=34.1Km
起床5:30ーバス6:35ー昨日最終地発6:45ー岩屋大師7:30ー昼食
「土佐ロイヤル・ホテル」11:30~12:50ー琴ヶ浜13:20ー丸米旅
館16:05ー二十八番札所・大日寺16:30~55ー丸米旅館(泊)17
;30

また、朝からスッキリしない天気。大雨でないがシトシト・ショボショボって感じ。南から湿った空気が入っている。四国山地で雲が遮られ、西側の瀬戸内は良い天気。昨日最終地までバスで行って出発。今日も基本的には海岸線を歩く。1時間ほど行くと大きな岩をくり抜いた岩屋があり喫茶店と仏様があった。

先は、防波堤歩道が続く。脇を阿佐線(ごめん・なはり線)が走る。時々、一車両だけゴーと通過する。通勤・通学時間で満員だった。

防波堤は秋の台風で所々決壊し、大きな砂袋が置いてあった。その度に国道を迂



回しなければならない。辺は「ナス」の一大産地だった。大きな温室がいたるところにあり、見事なナスがたわわに実っていた。

気温が高いこの地は11月でも温室なら十分育つ。そのほか「ショウガ」も凄い。静岡に帰り改めて調べたら、この時期のナスは殆ど高知産だった。ほかに珍しい「イモの花」を発見。初めて見た。やっぱり暖かいのだろう。



ナス

サツマイモの花



昼食の時間になったが、食堂がなかった。あったが、今日は祭日で休み。参りました。バスで探しに行く。T運転手は、一回探しに来たが無かったと言う。そこを再度行ってください、渋々嫌々ながらのイライラ運転。

ところが、土佐ロイヤルホテルで昼食をやっていた。看板が進行方向逆でTは気がつかなかったようだ。

バスを左側に止めて後続車が切れるのを待ってUターンのタイミングを窺う。交通量が多くなかなかターン出来ない。しばし待ち、とその時、バスは後ろ右手をよく確認しないでターンに入った。

しかし、軽が来ていた。道路半分出たバスに軽は衝突寸前、ヒラリとかわし反対車線に大きくはみ出し、瞬間傾き横転しそうな「二輪走行」だった。一瞬の出来事だったが、バスに悲鳴が走った。危なかった。もし、対向車線に車が来たら重大事故だった。T運転手はプロとして猛省を促したい。

「土佐ロイヤルホテル」は、近くに安芸市営球場があり、阪神タイガースが春にキャンプを行い宿泊するホテルだった。いたるところに歓迎旗がなびいていた。刺身定食を食べたが美味しかった。

午後は「日本白砂青松100選・琴ヶ浜松原」を通過し、道の駅「やす」で龍馬ポーズを気取った。赤岡町に入り、今日の宿「丸米旅館」前を通過し、大日寺に向かう。すぐ近くの話だったが、寺まで2Kmの長いこと長いこと。私はご朱印が明日だと、厄介なので走って行ったが、死にそうだった。(笑い)



琴ヶ浜



龍馬ぞよ！！

時間が遅くお勤めが十分出来なかったのので、明朝、再度訪れることとし、宿に向かった。「丸米旅館」は、安かったが綺麗でトイレが部屋にあり、ウォシュレットだった。これは、四国お遍路で初めてだった。だだ、残念なことにシーツは使い回しだった。夕食は豪勢だった。女将のサービスで「ニンニクが山盛りの土佐造り」これは、疲れた体にサイコーでした。

掛け軸を忘れたSAさんは、娘さんに頼み、宿に宅急便で送って貰った。そして電車・公共バス利用して二十五番札所・津照寺まで戻りご朱印を頂いた。D観光バス利用の手もあったが、SAちゃんは自分のことは自身で決着をつけた。

この日、途中で東京の中年男性と歩きを共にした。彼は勤め人で時間が余り取れない。金曜日夜、品川発のバスで徳島に早朝着き、電車・バスを乗り継ぎ来るといふ。今回は連休だったが、いつもは土・日曜歩いて、時には飛行機で帰京するそうだ。



丸米旅館女将

二十八番札所・大日寺



この方とは数日一緒だったが、驚いたのが東海自然歩道を10年掛けて踏破したそう
うだ。しかも、内容が奮って、全て「日帰り」にこだわったそうだ。世の中、様々な
方がいると思った。



ニンニクの山
土佐造り

第4日目 11月4日(木・晴) 通算歩行日数=14日 距離=24.2Km
起床5:30-宿発バス6:55-大日寺下7:15-二十八番札所・大日寺
7:30~45-二十九番札所・国分寺10:00~30-昼食・一宮「兼山」
12:15~13:10-三十番札所・善楽寺13:25~50-牧野富太郎記
念館15:20~35-三十一番札所・竹林寺15:35~16:05-下田
川地先16:20-バス-桂浜荘(泊)17:15

今日は天気が良さそうだ。バスで大日寺下まで行き、改めて寺でお勤めを済ます。
自転車通学の学生に見送られ、国分川を渡る。後は田舎道を進む。途中に立派なお堂
があった。トイレもあり良かった。先でYさんが、「へんろいし饅頭」を買った。こ
れは名物らしく、国分寺でいただいたが美味しかった。



酒(減)地蔵尊??

二十九番札所・国分寺





へんろいし饅頭

立派な山門の国分寺に入る。本堂・境内は素晴らしかった。中に「酒断地藏尊」があった。私は不謹慎だったが、「断」を手で覆って、「減」として記念写真を撮った。



食堂「兼山」と女将



三十番札所・善楽寺



寺を後にして、国分川沿いに進み、小さな峠を越えて一宮（いっく、と読む）に入り昼食となった。今回も地元の食堂利用が多かった。地元食堂は様々な顔が見えて楽しい。この日は、夫婦で営業する「兼山」。女将は、気風のいい方。ビアをガンガン持ってきてくれた。

昼食後、すぐ近くの三十番札所・善楽寺に向いお勤め。賑やかな市内を通過し、今回どうしても寄りたかった、「牧野富太郎記念館」に向かう。故牧野富太郎氏は、植物学者で高山植物の研究でも知られる。



ミャンマーバナナの実



植物園は、標高約150mの五台山にあって、隣に三十一番札所・竹林寺が続く。北側の遍路道から上り植物園に入る。中は有料館と無料展示館があった。温室に珍しい花、美しいランやミャンマーバナナが実っていた。

見学後は竹林寺に入る。赤い大きく立派な、五重塔があった。本堂は工事中でシートに覆われていた。境内には、「五智如来」（ごちによらい）と呼ばれる、立体曼陀羅があった。大日如来のさとりの世界を表した立体曼陀羅とのこと。

寺を辞して山を下り、下田川の沿って進み、県道R247に出る。今日はここで終了。目前の禅師峰寺まで行けなかった。バスで今回最高に期待の「桂浜荘」に向かう。「桂浜荘」には、「はちきんの湯」があった。はちきん、とは??

「はちきん」とは、「男勝りの女性」を指す土佐弁。ならびに高知県女性の県民性を表した言葉である。話し方や行動などがはっきりしており快活、気のいい性格で負けん気が強いが、一本調子でおだてに弱いといわれる。後ろを振り返ることなく前進し続けるといった頑固さや行動力あふれる点で、土佐の男性と共通する。ちなみに、男性は「いごっそう」



三十一番札所・竹林寺



早朝、Sちゃんと桂浜に下った。懐中電灯で宿から急な階段を下りて行く。灯台があり、大きな龍馬像が東の海を睥睨していた。強風で波は荒かった。

第5日目 11月5日（金・終日小雨） 通算歩行日数＝15日 距離＝30.7Km
 起床5：30－宿発バス6：50－下田川地先7：30－三十二番札所・禅師峰寺
 8：20～55－種崎渡し船10：35～11：15－三十三番札所・雪蹊寺
 11：40～12：00－昼食・長浜「竹村食堂」12：15～12：55－三十四番札所・種間寺
 14：40～15：10－仁淀川地先16：30－三陽荘（泊）
 17：00

朝から天気は悪かった。シトシト雨が続く。例によって太平洋南岸が悪い。バスで昨日最終地まで行く。左手前方の小高い所に禅師峰寺はある。裏の山道を上る。雨が流れ滑る。ひと上りで境内着。眼下に太平洋が広がり、ビニールハウスが凄い。



三十二番札所・禅師峰寺

山を下りて種崎に向かう。三十三番札所・雪蹊寺は岬の対岸なのでフェリーで渡る。フェリーは「龍馬」という。高知県営で無料。自動車は乗れないが、自転車・バイクはOK。所用時間は、10分程度。船長は親切な方だった。



フェリーと船長さん



無事、渡り終えて雪蹊寺に向かう。長浜は大きな町ではないが、何故か賑やかだった。ぼちぼち昼食時間なので、食堂に目星をつけて境内に入る。

・・・寺歴をたどると後に寺は荒廃し、月峰和尚が元親に依頼されて寺を再興し、元親の死後その菩提寺となり、元親の法号にちなみ、雪蹊寺となった。明治以後は大玄和尚が再興された。静岡県三島市・龍沢寺の今はなき山本玄峰師は、若い頃失明に近い眼病にかかり、その回復を祈願し素足で七回目の遍路中、大玄和尚と出会い「心眼をひらけ」の一言で出家したという・・・ネット



三十三番札所・雪蹊寺

武村食堂





玄峰老師碑

と、私たちと少なからず、ご縁のあるお寺で、山門左手に玄峰老師の記念碑があった。S、Yさんがそれをしっかり見入っていた。

昼食は、少し戻り「竹村食堂」で摂った。店は七十過ぎの奥さんに先立たれた気のいいオヤジと近所のオバサンでやっていた。オヤジが「発明」した、何とかラーメン？と、変わっている、ママアのオムレツがお勧めだった。

昼食後、三十四番札所・種間寺に向かう。雨は相変わらずシトシトだった。種間寺は田んぼの中だった。記念撮影をしたが、帰ったら何故か写っていなかった。こんなことは初めてだった。

三十四番札所・種間寺



寺を出ると、辺りは一面のショウガ畑だった。とにかく高知はナス・ショウガ・ニンニク栽培が凄い。だが、何故か美味しそうなショウガが畑の回りに捨てて？ある。

なら拾いましょうで、わらわらと拾い集め皆で分けた。このショウガは、帰静後もなかなか重宝でした。

お遍路の裏道を進む。今日もぼちぼち終了時間だが、バスが来ない。ひとつ走りして迎えに行く。今日の宿、三十六番札所・青龍寺近くの「三陽荘」に向かう



第6日目 11月6日(日・晴) 通算歩行日数=16日 距離=26Km

起床5:30-宿発バス7:00-森山地先発7:35-三十五番札所・清滝寺
9:00~30-高岡町商店街-昼食・宇佐漁港11:30~12:20-塚地
坂トンネル12:40-三十六番札所・青龍寺14:15~55-明德義塾-宇
都賀山地先15:50-須崎「西村旅館」(泊)16:40

お遍路最終日。昨日の最終地から出発。大きな仁淀川を渡る。天気はまあまあで川面に薄い霧が掛かっていた。反対から来た逆打ちの男性とすれ違う。歩き・単独・逆打ちだったが、一気かどうかは不明。

川の工事現場の看板に「真剣だと知恵が出る 中途半端は愚痴が出る いいかげんは言い訳ばかり」の言葉があった。

清滝寺は標高約100mの小高い山上にあった。急坂を上って境内に着いた。眺めは良い。眼下に高知自動車道が流れる。

仁王門を潜り、長い階段を上ると境内に着いた。左手に大きな観音像があった。お勤め後、高岡商店街を通過し、南下し塚地坂トンネルを潜り、宇佐漁港に下って行く。

遙か前方には大きな、宇佐大橋が架かっていた。昼食は、バスで宇佐漁港に行き摂った。午後は宇佐大橋を渡り、青龍寺に向かう。橋は、手摺が低くてちょっと怖い感じだった。明德義塾のバスが通過した。昔、大相撲の朝青龍がこの学校に在籍したそうだ。蟹ヶ池の縁を歩き青龍寺に入る。ちょっと古い感じの寺だった。



三十五番札所・清滝寺





波切不動明王



三十六番札所・青龍寺

寺は、弘法大師が中国留学中、青龍寺の恵果阿闍梨について学ばれた。帰国にあたり師の恩に報いるため、有縁の勝地を選ぶようと、明州から東に向かって独鈷杵を投げられた。独鈷杵は東方に飛び、やがてこの地の山上にある松に止まった。

帰国した大師はこの地へ巡錫して独鈷杵を感得し、弘仁六年（八一五）嵯峨天皇に奏聞して一字を建て、自刻の浪切不動を安置し、恩師を慕って寺名を青龍寺とした、とあった。

仁王門の左に滝があり行場になっていた。ただ、この滝は人工滝のようだ。境内には、剣をかかげた大きな、波切不動明王が佇立していた。

120段余りの階段を上り本堂に到着。ここで今回、最後のお勤めを果たす。寺から細長く須崎に続く半島を16時まで歩き終了した。

バスで今回最後の宿泊地、須崎の「西村旅館」に向かった。旅館は、婿の旦那が切り盛りしている旅館だった。シーツが使い回しでちょっと辛かった。食事はまあまあ、良かった。

第7日目 11月7日（月・晴） 歩行なし

起床5：30－宿発バス7：00－高知自動車道－徳島自動車道－淡路島一名古屋－静岡－長泉町18：30ころ



西村旅館



女将

バスに揺られて高知自動車道を走る。今回の帰りから自動車専用道路を使えるので少し早く帰れそうだ。お遍路は無事終わって良かった。

ただ、私は少々複雑な心境だった。出発前日、ピンピン元気だった九十四歳の義母が突然亡くなった。何と言う間の悪さ……。今回のお遍路をどうするか、決断する時間はなかった。

実は義父の時も剣岳に上っていて葬儀に出られなかった。道楽をこいと、親の死に目に会えない……。典型的な親不孝例だった。

どうしよう??どうするか??バス会社、宿、参加の皆はどうか?.....。しかし、しかし、結局実施した。ここで止める訳にはいかなかった。事後は自身で始末するしかないだろう。

帰着後、相当の軋轢はあった。特に娘とは「険悪・泥沼・戦争」状態で修復にかなりの時間「努力・忍耐・辛抱」が必要だった。合掌。



切り抜き帳

- 廃仏毀釈・・・神仏分離令などの実施によって起こった寺院や仏像・仏具などの破壊運動のこと。全国的な寺院に対する破壊行為や藩による寺領の没収などにより仏教は大打撃を受けた。神道分離令の目的は神と仏を分離することで仏、を破壊することでなかったが、極端な破壊行為につながった地域もあった。
- 野中兼山・・・野中 兼山（元和元年（1615年）～寛文3年12月20日）は、江戸時代初期の土佐藩家老、儒学者。谷時中に朱子学を学び、南学による封建道徳の実践に努めた。多くの改革で藩を助けたが、藩士の恨みや、過酷な負担を強いたことによる領民の不興を買い失脚。一族が絶えるまで家族全員が幽閉された。
- 南学・・・南学（なんがく）とは、日本では土佐における朱子学をいう。海南学派とも呼ばれる。室町時代末期（天文年間）に儒者・南村梅軒が土佐で朱子学を講じたことを祖とする。
- 補陀洛山・・・補陀落（ふだらく）は、観音菩薩の降臨する霊場であり、観音菩薩の降り立つとされる伝説上の山である。その山の形状は八角形であるという。インドの南端の海岸にあるとされた。補陀落山（ふだらくせん）とも称す。
- 運慶・・・平安時代末期、鎌倉時代初期に活動した仏師。運慶は興福寺を拠点に活動していた奈良仏師康慶の子であるが詳しい生い立ちは分かっていないが、12世紀半ば頃の生まれと推測される。
- 独鈷杵・・・独鈷杵は、金剛杵（こんごうじょ）の一つ。日本仏教の一部宗派（天台宗・真言宗・禅宗）やチベット仏教の全宗派で用いられる法具。仏の教えが煩惱を滅ぼして菩提心（悟りを求める心）を表す様を、インド神話上の武器に譬えて法具としたものである。
- 鐘楼・・・寺院や教会などにおいて鐘を設置するために設けられた施設。ただし、「鐘楼」と称していても東洋の鐘と西洋の鐘には様式に違いがあるほか、建築学の文献等では教会建築のカンパニーレ（鐘塔）は鐘楼と別に立項されることもあり様式的には違いがある。
- 阿佐線・・・徳島県海部郡牟岐町の牟岐駅から高知県南国市の後免駅を結ぶべく計画された、日本鉄道建設公団による工事線の名称である。
- サツマイモの花・・・花の形はアサガオを小さくしたような形で薄いピンク色をしている。熱帯、亜熱帯ではよく開花して結実しますが、我が国では沖縄県を除いて通常の条件では開花しません。けれども、条件によって開花する。これは栄養生長（芋の肥大）ができない環境下におかれたために生じる現象。
- 鰹のタタキ・・・高知県（土佐国）発のカツオを用いた魚料理（刺身の一種）。鰹を節に切り、表面のみをあぶったのち冷やして切り、薬味とタレをかけて食べるもので、

別名「土佐造り」とも言う。

牧野富太郎・・・牧野 富太郎（まきの とみたろう、1862年5月22日（文久2年4月24日）～1957年（昭和32年）1月18日）は、日本の植物学者。高知県高岡郡佐川町出身。「日本の植物学の父」といわれ、多数の新種を発見し命名も行った近代植物分類学の権威である。その研究成果は50万点もの標本や観察記録、そして『牧野日本植物図鑑』に代表される多数の著作として残っている。小学校中退でありながら理学博士の学位も得て、生まれた日は「植物学の日」に制定された。

94歳で亡くなる直前まで、日本全国をまわって膨大な数の植物標本を作製した。個人的に所蔵していた分だけでも40万枚に及び、命名植物は1,500種類を数える。野生植物だけでなく、野菜や花卉なども含まれ、身近にある植物すべてが研究対象となっていたことが、日本植物学の父と言われる所以である。

五智如来・・・五智如来（ごちによらい）は、五大如来ともいい、密教で五つの知恵（法界体性智、大円鏡智、平等性智、妙観察智、成所作智）を五体の如来にあてはめたもの。金剛界五仏のことである。作例としては、東寺（教王護国寺）講堂、京都・安祥寺の像が著名である

曼荼羅・・・密教の経典にもとづき、主尊を中心に諸仏諸尊の集会（しゅうえ）する楼閣を模式的に示した図像

坂本龍馬・・・坂本 龍馬（天保6年11月15日～慶応3年11月15日）は、江戸時代末期の志士、土佐藩郷士。脱藩したあとは志士として活動し、貿易会社と政治組織を兼ねた亀山社中（のちの海援隊）を結成した。薩長同盟の成立に協力するなど、倒幕および明治維新に関与した。大政奉還成立の1か月後に近江屋事件で中岡慎太郎、山田藤吉らとともに暗殺された

恵果阿闍梨・・・恵果（えか/けいか、天宝5載（746年～永貞元年12月15日（806年1月12日））は、中国唐代の密教僧で日本の空海の師。俗姓は馬氏。長安の東にある昭応県（現在の臨潼・りんどう）の出身。真言八祖の第七祖。真八祖像として描かれる際は、童子を従えた姿に描かれることになっている。

嵯峨天皇・・・嵯峨天皇（786年10月3日～842年8月24日）は、日本の第52代天皇。ちなみに現在の天皇は、徳仁（なるひと、1960年〈昭和35年〉2月23日生）は、日本の第126代天皇（在位:2019年〈令和元年〉5月1日）。御称号は浩宮（ひろのみや）、お印は梓（あずさ＝キササゲ）

浪切不動明王・・・弘法大師空海が、密教の勉強をするため、遣唐使の船に乗って、東シナ海を渡り中国へ向かっていた時、嵐に見舞われ、船が沈没しそうになった。その度に自身で彫った不動明王像を掲げ、不動真言を唱えた。すると、船を飲み込むような大浪が真っ二つに割れ、嵐をくぐり抜けて唐に辿り着くことができた。それ以来、この不動明王は、浪切不動明王と呼ばれ、弘法大師の護り仏として深く信仰されるようになった。